

小柴見城跡

1988.3

長野市教育委員会
長野市水道局

序

悠久の歴史の流れの中で各地域に繰り広げられた先人たちの生活を少しでも多く認識するということは、単にわれわれの懐古の情を満たすにとどまらず、過去の人々の自然との関わりの深さや、人と人のつながりを知ることによって未来への文化を求めてゆくための一つの道程ともなりましょう。

今回調査の結果を報告する小柴見城跡は、中世信濃史における重要な城館の一つとして古くから研究者の注目を集めたものでありました。今回の調査は空堀部分のみという限定されたものではありますましたが二重堀という特異な形状も確認され、今後の研究にとって新たな一面を提供するものとなりましょう。

時代の要求により開発を進めるための最低限度の調査に止めた結果を、ここに長野市の埋蔵文化財第27集として報告いたしますが、この報告が今後長野盆地の中世史発明のための基礎資料として広く活用されることを期待してやみません。

末筆ながら直接・間接に調査に参加されたみなさまの御協力に記して深謝いたします。

昭和63年3月

長野市教育委員会教育長 奥村秀雄

例　言

- 1 本書は長野市水道局による夏目ヶ原浄水場拡張工事に伴う工事用道路施設予定地内における緊急発掘調査報告書である。調査対象地は長野市大字平柴字夏目ヶ原 162-13番地外の地籍に存在する。
- 2 調査は長野市公営企業管理者と長野市長との契約に基づき、長野市教育委員会・埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 遺構図はセクション実測図は1:60、調査区測量図は1:100の縮尺とした。
- 4 調査の諸記録及び出土遺物は長野市立博物館において保管されている。

目　次

序	
例言	
I　調査に至る経過と方法	1
1　調査に至る経過	1
2　調査の体制	1
3　調査の方法	1
4　調査日誌	2
II　遺跡周辺の環境	2
1　地理的環境	2
2　歴史的環境	4
III　調査	6
1　遺構	6
2　遺物	9
3　まとめ	10

挿図目次

図1　遺跡周辺の地形	3
図2　調査区測量図	(折り込み)
図3　小柴見城址略測図	8
図4　トレンチ断面実測図	9
図5　出土遺物実測図	10

図版目次

I 調査に至る経過と方法

1 調査に至る経過

昭和62年、長野市水道局は長野市大字平柴字夏目ヶ原に所在する夏目ヶ原浄水場拡張工事に伴ない、工事用道路の施設を計画した。事業予定地は小柴見城址の空堀の位置にあたり、長野市埋蔵文化財センターは事業着手前に、空堀の規模・形態等につき、確認調査による何らかの記録保存を行う必要性を認め、昭和62年10月26日より調査に着手する運びとなった。

2 調査の体制

調査主体者	長野市教育委員会教育長	奥村秀雄
總括責任者	長野市埋蔵文化財センター所長	小木曾敏
庶務係	" 所長補佐	小山 正
	" 職員	倉田佳世子
調査係	" 調査係長	矢口忠良
	" 主事	青木和明
	" 主事	千野 浩
	" 職員	中殿章子
	" 職員	横山かよ子
特別調査員	小林計一郎 (長野郷土史研究会 会長)	
	小出 章 (長野県文化財保護協会 常務理事)	
執筆者	和田 博 (長野市立博物館専門主事 第II章執筆)	
調査作業員	大田 寛 蔵之内栄二 小穴忠雄 小嶋清強 田尾 功 丸山純一 丸山廣広 百瀬英実 森川武夫 (以上 長野高専生徒) 池田喜 久雄 井上仁八 植澤漸市 木村喜佐雄 小宮山孝一 鈴木恒治 鈴木武弓 竹ノ内正義 林 喜幸 藤原喜一 松下利久	

3 調査の方法

道路施設工事によって本郭北側の2本の堀のうち、北側の堀と中央の土塁部分の約半分が破壊されるため、調査は北側の堀切の様相と土塁の構築状況を明らかにすることを目的とした。したがってまず堀に直交する南北方向にトレンチを設定して構築状況ならびに堆積状況を確認することを試み、その後トレンチの東西方向へ調査区を拡張して、空堀構築時の様相を把握することを試みた。調査区はトレンチを境として東方を第I区、西方を第II区とした。日程、調査予算等の関係から掘削にあたっては可能なかぎりバックホーを活用した。

4 調査日誌

- 10月24日 発掘機材搬入。
- 10月26日 発掘調査開始。塙中央部に南北方向のトレンチを入れる。塙底部までトレンチ断面にて確認する。
- 10月27日 第Ⅰ区調査開始。
- 10月28日 第Ⅰ区調査終了。第Ⅱ区調査開始。
- 10月29日 第Ⅱ区調査継続。
- 10月30日 第Ⅱ区調査終了。トレンチセクション実測。発掘機材撤収。
- 11月4日 発掘区測量作業（平板測量）。本日にて現場におけるすべての作業を終了する。

II 遺跡周辺の環境

1 地理的環境

標高 785m の旭山は、新第三紀中新世の海底火山活動で生じた凝灰岩層からなる富士ノ塔山塊の東端に所在し、造山活動による隆起と共に差分浸食を受けて残された比較的硬い流紋岩が主体となって構成されているため、急峻な山容を見せて市街西郊にそびえ立っている。殊に北から東側にかけては門沢断層が走ったり山脚を裾花川に洗われたりして断崖や沢崩れを伴い、一気に400m も駆け下りる急斜面となり、以前は山陰に少年たちの絶好な川遊びの場となっていた竜宮淵の奇勝も兎もだらぬ。

裾花川は門沢断層沿いにさらに東南流して旭山東南山麓台地の北端を浸食し、カジカ鳴く白岩の景勝を造っている。白岩は流紋岩質凝灰岩（裾花凝灰岩）を基盤としているが、詳細に観察すると旭山寄りから流紋岩、溶結凝灰岩、凝灰岩と漸移し、それぞれの境目に旭山断層と平柴断層の破碎帶が存在する。これらの断層は当市東北部の若柳地域を走る田子断層に対応するもので、平柴台地に階段状地形を形成し、さらに西南に延びて富士ノ塔山塊の東南山腹に三登山南斜面間様数多くの三角末端面（Terminal Facet）を構成している。

平柴台地はこのような基盤の上に砂礫などを主体とする第四紀更新世後期の河岸段丘堆積層（南郷層）が載る。このような豊野層の上に南郷層が堆積する様相は、往生寺台地—城山丘陵—若柳台—長峰—豊野町山麓丘陵—觀音山などに広く見られ、豊野湖盆地やそれ以後の旧裾花川堆積が地殻変動によって隆起すると共に門沢断層などによって断ち切られたという平柴台地の生い立ちを物語っている。また旭山寄りの台地上部では大黒山や阿蘇陀堂高地下の傾斜変換線（平柴断層）附近まで崖壁が南郷層をさらに覆い、勝手沢以南では旭山断層線との接点附近を肩頂とする平均10度程度の斜度で日当たりのよい崖壁状地形を呈する。



図1 造耕周辺の地形（○印が調査地）

戦時中までは畦畔に杏が咲き桑園や野菜地あるいは食糧増産の委秋風景が展開する典型的な近郊農村であり、廻端附近から台地麓を縫って大町街道がうねり街村が両側に続いているが、街道沿いに国道19号線が整備され、それを基線として扇状地や低平地に団地が造成され、現在では一大住宅地域となり、平柴地域では台地にリンゴ畠も広がっているが、勝手沢以北にも住宅が並んでいている。

台地東南端には本城跡遺構や夏目原淨水場のある小柴見丘陵が右端を構成している。この丘陵は犀川以北の盆地西縁部に城山・若狭台・長峰・豊野山麓丘陵・観音山と前記のように続く豊野層丘陵に観察される背斜軸の一貫で、西翼の断層谷に勝手沢支流の権現沢が深い浸食を刻みながら南流し、その延長線上の白岩には破砕帯も存在する。東翼は根花川低平地と70~80mの段差を形成し、そこに替佐推定断層に連続するとみられる小柴見活断層の存在を指摘する研究もある。この東西両翼の層すべり急斜面が、丘陵南端を切りとる勝手沢の深い浸食谷と相俟って、北を白岩の断崖で限られる小柴見丘陵をより要害堅固な地としている。

2 歴史的環境

「朝日てり夕日輝く其下に黄金千杯漆千ぱい」の朝日長者伝説を有する長者屋敷古墳から1691年（元禄4）に直刀？ほか勾玉・金環・馬具などの出土があり、この地域が幾多歴史の春秋に富むことを示唆している。

県史所載の遺跡地名表によると、附近に櫛文・弥生時代を主とした土器・石器等出土地が数ヶ所挙げられているが、わけても平柴台住宅団地造成に先だって1971年（昭和46）に調査された平柴平遺跡では、櫛文時代後期の板石遺構6、弥生時代住居址16、弥生~古墳時代の方形周溝墓4、古墳時代後期~平安時代土塙墓8等が検出され出土した遺物に多量の炭化米も含まれていた。

安茂里地域では山麓から時には薪古平古墳群のように400mも比高差のある山頂近くまで数多くの古墳が残存し、前記地名表には平柴と小柴見地域のみで22基が記され、その大部分が後期の横穴式円墳とされている。それらのほとんどは既に盗掘されており、副葬品は双子塚など3基から玉類・金環・銀環・直刀・馬具が各1基からと報じられているにすぎない。これ以外にも副葬品が出ていることは明らかで、前記の長者屋敷古墳副葬品のほか、平柴出土というだけで細部地点不明の獣形鏡1点（淨水場出土との伝承もある）と円筒埴輪2点の現存からも推察できる。

自然環境からしても居住に快適なこの地では、根花川を源とするサケ・マスを捕り、台地下の低湿地に水田を営んでいた人々が古くから住みついでムラを構成し、その首長やウジノカミは人々の暮らしを見下ろせる台地に選ばれ、次第に遠くからもこの付近に家族の奥津城を求めるムラオサが増していったであろう。

そのころ根花川は現在の県庁付近から居町・七瀬方面に東南流しており、その流路が現状のように人工的に変えられたのは近世初期で、明治大正年代まで白岩側からも平柴台地へ登れる山道

があったという。

従って明治10年代に提出された安茂里村誌に「平柴村は古昔茅井郷に屬す」とあるもの果してそうであったか、それとも隔てる川もなく地域的に近接地の芹田（世無田）郷に含まれていたのか、律令時代の情況はにわかには断定できかねる。

平安末期の莊園に天台領月林寺がある。本城跡付近もその領域内か否かは不明ではあるが、そこから西南1.5kmにある正覚院が月林寺の跡とされる。この正覚院は別名密寺（久保寺）と呼ばれ、藤原中期に造作された桜木一木造りで像高181cmの木造伝仏音菩薩立像（県宝）を安置し、遠近の厚い信仰を築めている。以前はこのほかにも数軒の古仏像があり、その寺史の古さを物語る。

正覚院西南隣地のケルンバット（Kern but）に鎌寺城跡があり、ケルンコル（Kern col）を堀切に利用している。ここは密寺氏の要害で、居館は南山麓にあったと伝える。1400年（応永7年）新信濃守護小笠原長秀の後序入部にあたって、国人たち大文字一塙の面々がその態度をここで謀議している。その後1465年（寛正6年）ごろ鎌寺氏は西隣の小田切氏に臣下の礼をとっていることが源氏御布札之古書からうかがえる。

南北朝時代以降は平柴に守護所が設けられていた。鎌倉時代に船山（更埴市及び戸倉町）に置かれていた守護所は、親忠の擾乱にあたって1351年（親忠2年）足利直義党に攻撃された。平柴に設置されたのは、上杉朝房守護時代前半の1366年（貞治5年・正平21年）～1370年（応安3年・建徳1年）ごろと推定され、応安3年守護代二宮氏の軍勢が春山城（若狭）を攻めた後、水鉢・平柴陣所の警備に当り、秋10月には平柴を拠点として栗田城を開んでいる。

1387年（至徳4年・元中4年）守護斯波義種に反抗して横山城に兵を挙げた村上氏ら国人たちが守護代二宮氏泰の守護する平柴守護所に押寄せ、大塔合戦翌年の1401年（応永8年）には小笠原長秀にかわって斯波義種が守護に補任され守護代として細川忠興がこのに在住している。1404年（応永11年）「大將細河兵庫助殿奥都御発時桐原若槻下芋河之要害落云々」（市川文書）とみえるのもここを拠点としたものであり、くだって1446年（文安3年）信濃守護小笠原家の家督をめぐって小笠原宗康と同長持が漆田原・大黒塚で戦っている。

大黒塚は現在左近稻荷社のある大黒山（丘山に古墳が築かれている）で、漆田原は台地下と田畠花川以南に広がる岡田・中御所付近一帯とされている。従って守護所は単に大黒山のみにとまらずこの小柴見丘陵をも含んだ地域と考えられ、こからは漆田原を足下にし、中世には後序のあった後町・間御所付近も指呼の間に見下ろせ、守護所として絶好の地を占めている。

甲越合戦の際この地は当初栗田氏の拠るところであった。1555年（弘治1年）の条に「善光寺ノ堂主栗田綱ハアサヒノ城ニ御座候アサヒノ要害エモ武田晴信人數ヲ3000人サケハリテイル程ノ弓ヲ800丁テツハウ（鉄砲）300カラ御入鉄」（勝山記）、「旭の地ことごとく破却し和与の儀を以て馬を納め候」（景虎書状）とか、弘治3年には「敵陣數ヶ所根小屋以下悉放火同日旭要害再興居陣候」（間前）とあるように弘治年間には甲越両軍とともにこゝが作戦の要衝であったことがうか

がわれ、阿弥陀堂高地地続きに御陣山地蔵もある。

なお、小柴見城主の小柴見宮内は栗田氏配下であったが、1561年（永禄4）越後方に通じたとして武田晴信（信玄）に誅されたという。（甲陽軍鑑）

近世初頭の1611年（慶長16）朝日山は善光寺領と認められ、1645年（正保2）平柴村が三輪村の一部と交換されて善光寺領となり朝日山守りをして以来、度々入会権その他で小柴見村などとの出入りがあったが、大峯山と共にきびしい山定め（1686・貞享3年設定）が厳守され、本堂再建（元禄・宝永年間）に松材が伐採された以外は明治以降も国有林・風致保安林として保護され、豊かな緑を保持して今日に及んでいる。

近代になって1913年（大正2）狐池一本松地蔵（現往生寺浄水場）に引継いで、1925年（大正14）城山でのサイレン吹鳴に変わるまで本城跡のある小柴見丘陵北端・454.7mの地点で午砲が鳴らされ、ドン山の愛称は今も老人たちがしばしば口にするところで、当時の石垣も残存している。1929年（昭和4）夏目ヶ原浄水場がこの丘陵に設置されて以来、施設の整備拡充に伴って城跡遺構の大半が姿を消していった。

（参考文献）『長野地域の地質』『信州北部地方の新第三系の地質学的研究』『上水内郡地質誌』『上水内郡誌』『長野市史』『長野県町村誌』『長野縣史』『長野市史考』『長野県の地名』

III 調査

1 造構（図2～4）

トレントの設定位置は図2に示したA-A'間にあり、また断面実測図は図4に示した。断面実測図からもわかるように、堀は現状では約1.90～2.0mほど埋まっている。堆積状況は部分的にレンズ状の自然堆積が認められるものの、7～11層等の堆積には人为的な掘削・埋め戻し等の可能性も考えられる。また3層は灰白色粘土（地山）のブロックを非常に多く含み、後世に土壌を削平した時に形成された堆積層と考えられる。堀は地山であるいわゆる鰐花崗岩層を掘り切って構築されている。尾根部分を掘り切っているわけであるが、中央土壌部分は後世の削平がかなり及んでいるため地形の復元は困難であり、地形的に凹んだ場所を意識的に選定して空堀を構築したか否かは不明である。堀の断面形態は角のとれた逆台形を呈するが、部分的に鋭い逆台形を呈する場所も認められる。堀底は平均幅0.90～1.0mほどの平坦面を形成するが固く踏みしめられたような痕跡もなく、また特別な施設も認められなかった。堀底と北方の郭との比高差は約5.20mを測り、また現状で確認できる土壌最高部との比高差は約2.70mほどを測る。堀から北方の郭への傾斜は平均40°前後で、最も傾斜の急なところでは45°前後を測る。また堀から土壌への傾斜は最高で60°前後を測り、測量作業の際には非常な困難をきたしたほどであった。中央部の土壌は、基本的には地山を掘り込んで形成し、さらにその上に盛土して構築されたものと思われるが、盛土の規模は削平のため不明であり、現状では60～70cmの盛土が確認されるにす

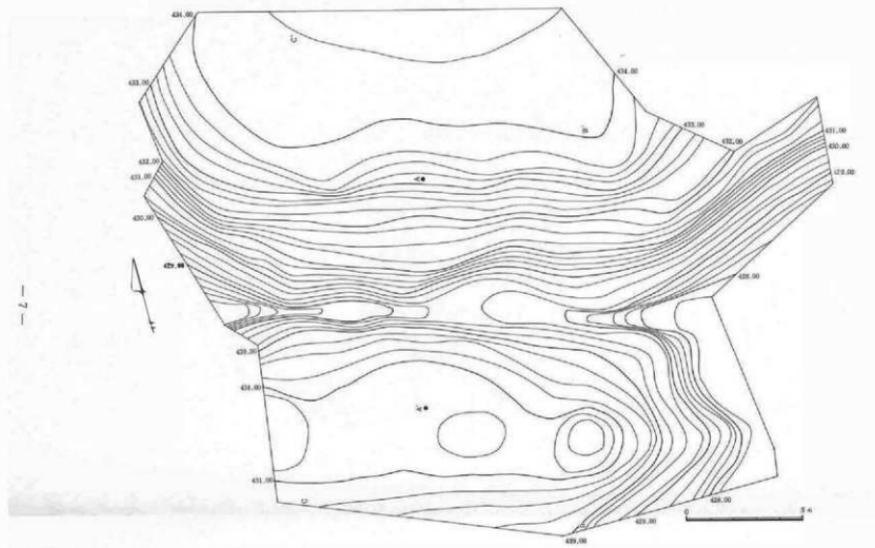
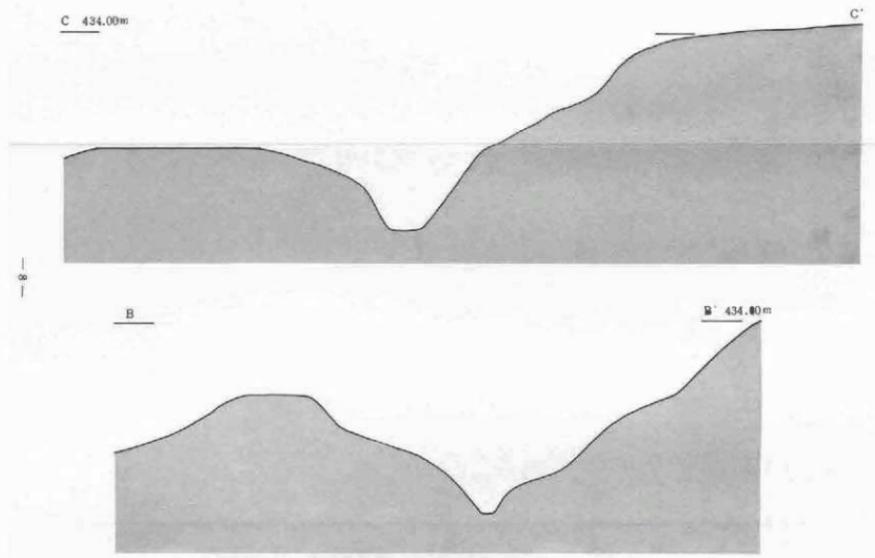


图2 地形区剖面图



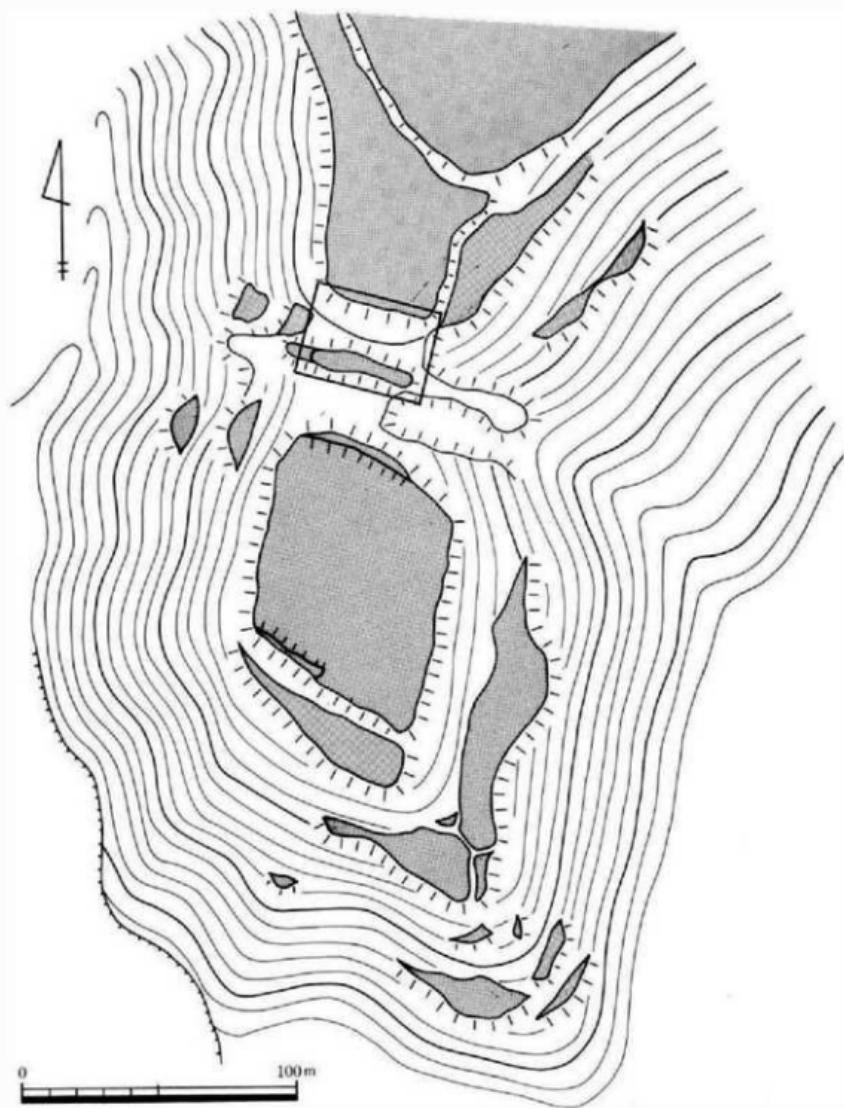


图3 小柴见城址略测图 (——内是调查区)

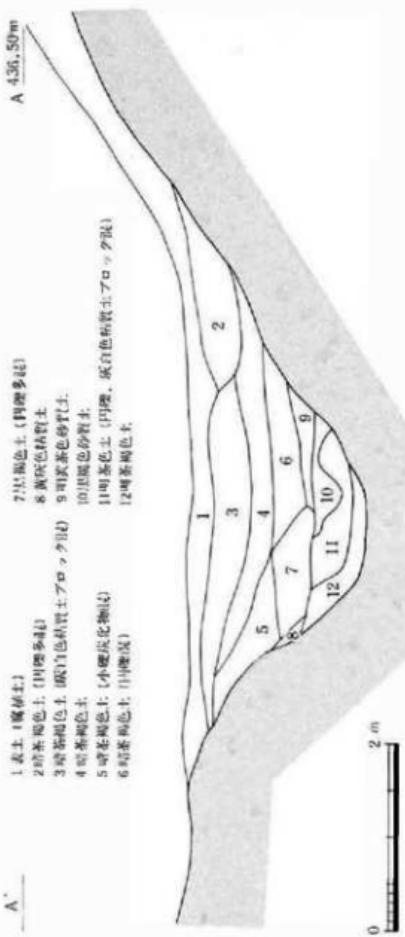


図4 トレンチ断面実測図

況は最も良い。溝約25.5cm、高さ11.2cm、ふくみ2.8cmを測る。白の目は六分画六溝式で、芯棒孔は貫通しておらずやや特異なものである。2・3はいずれもトレンチ掘削中に、堀底より約80cmほど浮いた状態で検出されたものである。

ぎない。また調査区土壌中央部は幅5mほどの平坦面を呈しているが、これも後世の削平によるものであることは明らかである。また土橋等の構築物の軌跡は今回の調査では確認されていない。堀ならびに土壌は東西方向へさらに伸びると思われるが、調査区ならびに調査における廃土処理の関係でこれ以上調査区を拡張することは不可能であったため、全体の規模等の詳細は残念ながら不明である。

2 遺物(図5)

石臼(粉挽き臼)が3個出土している。1は安山岩製の上臼で、半径約16.1cm、高さ約11.8cm測る。半分以上を欠損するが芯棒受けと供給口は確認できる。臼の目は六分画七溝式で、ものくばりの形状から左回転と考えられる。供給口の形状は円形を呈し、ふくみは約3.6cmを測る。また側面にはほぞ状の抉り込みが不明瞭ながら認められ、挽き木は横打ち込み式かと思われる。第II区から堀底に接した状態で検出された。2も安山岩製の上臼で半分以上を欠損する。半径約15.2cm、高さ8.6cm、ふくみ2.1cmを測る。芯棒受け、供給口は欠損しているため不明である。臼の目は磨耗が著しく詳細は不明であるが、3本まで溝が確認できる。3は安山岩製の下臼であるが遺存状

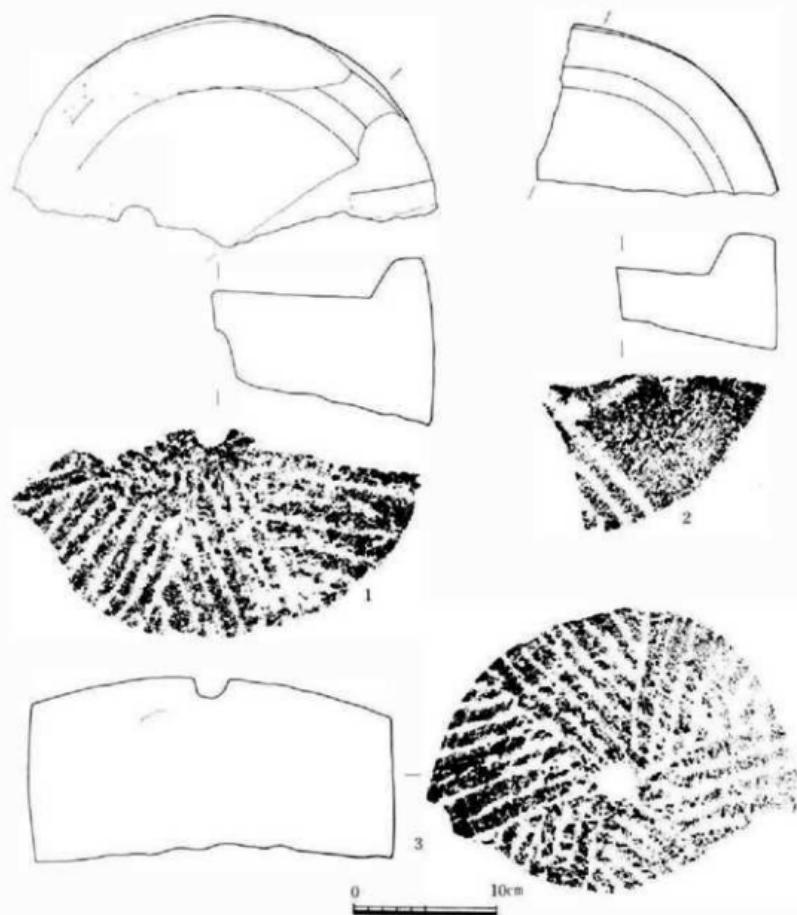


図5 出土遺物実測図

3 まとめ

小柴見城址をめぐる歴史的環境については第Ⅱ章に詳説されているとおり、南北朝時代以後の平柴守護所との関連、甲越合戦期における両軍の攻防との関連において、北信濃の中世史に対し等閑視できぬ重要な侧面がうかがわれる。今回の調査では空堀というそのごく一部を明らかにしたのみであり、その全容を明らかにするには至っていない。今後の調査にかかる期待は大きい。



小柴跡城址遺構
(大洲山城址より望む)



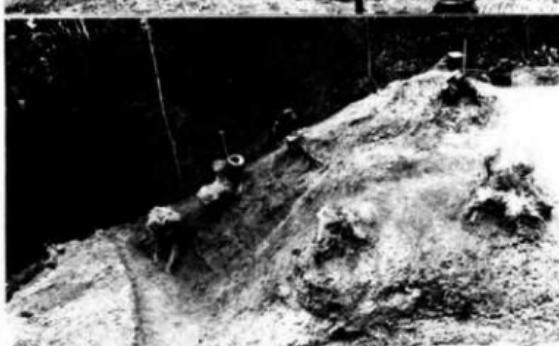
調査区全貌

トレンチ断面

图版2



断面区全貌



1区



II区

- 長野市の埋蔵文化財 第1集『信濃長原古墳群』
- 〃 第2集『浅川西条』
 - 〃 第3集『中村道路群』
 - 〃 第4集『塙崎道路群』
 - 〃 第5集『塙崎道路群(2)』
 - 〃 第6集『三輪道路・付水内坐一光神社道路』
 - 〃 第7集『田中沖道路』
 - 〃 第8集『旗ノ井道路群』
 - 〃 第9集『四ツ星道路(第1~3次)・徳間道路・塙崎道路群(3)』
 - 〃 第10集『湯谷古墳群・長札山古墳群・駒沢新町道路』
 - 〃 第11集『箱清水道路・大峰道路・大清水道路』
 - 〃 第12集『浅川扇状地道路群・牛込バスターミナル地点道路』
 - 〃 第13集『浅川扇状地道路群・鶴田道路・川田条里的道路・石川条里的道路』
 - 〃 第14集『石川条里的道路(2)・上駒沢道路』
 - 〃 第15集『箱清水道路(2)』
 - 〃 第16集『石川条里的道路(3)・(付上駒沢道路)』
 - 〃 第17集『浅川扇状地道路群・牛込バスターミナルB・C・D地点道路』
 - 〃 第18集『塙崎道路群(4)・市道松筋・小田井神社地点道路』
 - 〃 第19集『土口符原古墳・重要道路確認緊急調査』
 - 〃 第20集『三輪道路(2)』
 - 〃 第21集『芦田小学校道路』
 - 〃 第22集『吉田高校グランド道路』
 - 〃 第23集『横田道路群・富士宮道路』
 - 〃 第24集『塙崎道路群(5)・駒屋敷道路』
 - 〃 第25集『小島・柳原道路群・南川向道路』
 - 〃 第26集『東番場道路』

長野市の埋蔵文化財第27集

小柴見城跡

昭和63年3月20日 印刷

昭和63年3月31日 発行

編集・発行 長野市教育委員会
長野市埋蔵文化財センター
印 刷 西日本印刷株式会社